

わたしたちは、東日本大しんさいで、家が
 なぐられたり、電気がうしなわれたりして大
 へんでした。自分の家は、じいんでもものがぬ
 ちやくちやくになり、電気が水がなが、たの
 びで、福田小学校の体いくかんに、お母さんと
 三人でひねんしました。お父さんは、しごと
 でかえ。てくれませんでした。ひなんじよで
 は、かんじよのすすきさんたちとい。しよに
 すし、ゆんどうを見てもらいました。ひな
 んじよには、四日間いて、それから、じい
 ちゃん、ばあちゃん、お母さんと三人で、さ
 いたまのしんせきの家にひなんしていました。
 わたしたち福田小では、どんぐりプロジェクト
 クトにさんかしました。みんなえがおでうえ
 ていました。海の近くに公園がでまるので楽
 しみです。わたしたちのうえたどんぐりの木
 が、早く元気にそだつといいです。できたら
 何十年も新地にすんでいたいです。

東日本大しんさいの思い
 東日本大しんさいでいろいろな人がなくな
 ってしまった。ほんとうにかなしいです。あつ
 つなびで、いろいろな人がかぞくをなくして
 がわいアウです。しまもがぞくをなくした人
 は、わすれてないとおもいます。ぼくも、か
 なしいです。とてもがぞくもがわいアウです。
 まだかせつにいる人ぜんぜんもがわいアウ
 ず。あと家もなくした人まわすれていないと
 おもいます。なぜならぼくもだちも家もくる
 まもなくしたのがわいアウです。のなまが
 あったから、はうし、せんもてて、あつな
 えと、大くま町も、けなく、なう、かの、あう
 ず。二水が、あえう、う、か、いるから、あ
 ら、う、人が、いるので、し、う、ら、は、あ、た、す、け
 る、人、に、な、り、た、い、です。た、す、け、ア、え、が、お、を、見、た
 い、です。ぼ、く、の、が、ぞ、く、を、た、す、け、ア、が、ぞ、く、の、お、を
 が、お、を、見、た、い、です。が、お、は、り、ま、す。

「東日本大しんさいの たいけんだんと ふつこうくのおもい」

3年 名前荒葉月

わたしは、しんさいのあつた日は家でおば
 あち^やんとテレビを見ていました。そのとき
 大きなじしんがきました。おばあち^やんがわ
 たしの頭にぞぶと人をかぶせてまも^つてくれ
 ました。少しおさま^つたあとかたずけをして
 いるとおじいち^やんが、
 「つなみだにげろ」
 とこけびました。わたしは、みんたと家の中
 らの高い所に逃げました。あ^つというまに水が
 流れて来ました。家は半分より下まで^つか
 きました。真^ま黒な水でした。その時、お兄^あち
^や人は、人が流れていくところ見たそうです。
 わたしはびびりしていましたが犬をつないだま
 まだ^つた二つを思い出しました。水が少し引
 いたときに犬の声があつたのでおんしんし
 ました。わたしは目の前でつなみを見たので
 今でも少しこわいです。

「東日本大震災の たいげんだんと ふつこうくのおもい」

3年 名前 佐藤未悠

わたしは、はら町の畑でおばあちゃんので

うだいをしているときに、土地がきました。

そのとき、ちかくに、木があつたので木につ

かまりました。

そのとき土地がおちま、てつなみちうい

ぼうがな、こたかだいに車ごにげました。

それご、家はいつ倒れていってんだつたので

お父さんのしんせきの家はいつたりして

のあとしんち町のかんごやにかぞくみんな

いきました。

そのとき、わたしは、4さかだ、たのてあ

まりきおくがありませんでした。

だけど大震災いや土地は、もうこないで

ほしとおもいました。

「東日本大震災のたいげんだんとあつこうくのおもひ」

3年 名前菅野芽生

655

新地町立福田小学校 8歳

菅野 芽生

わたしが東日本大震災にあつたのはほ
いく所のときてした。
小さくてあまりおぼえてはいませんがして
もゆれてこわかつたことをおぼえています。
次の日、お父さんといっしょにフナミにあ
つた土地を見に行きました。
すこくがれきだらけでフナミのこわさをと
もかんじました。
それから何日間、電気や水道などのない生
活がづづきました。
いっもあたりまえだと思つていたことがで
きないということは不べんだと思ひました。
あれから4年くらいたちました。
フナミのひがいにあつたところは、がれき
はなくなり田んぼもつくれるようになりまし
た。まちがあつたところはどこからか土を
運んできて何かをつくらうとしています。
あと何年かかるか分かりませんが町はあつ
こうします。いっこの工事げん場にいるみ
なさん、がんばつて下さい。

「東日本大しんさいのたいけんだんと ふつこうへのおもい」

3 年前 斎藤 未由來

い	よ	ん		は	に		お	こ	ん	田	と	い	い	に	し	い	ほ						
し	し	ん	サ	た	ん	ほ	か	を	う	小	い	し	は	は	ん	ほ	い	め	東	日	本	大	し
に	ん	が	ポ	け	は	と	あ	を	え	学	わ	し	に	に	て	ん	た	日	本	大	し	ん	
き	し	し	ト	に	は	と	さ	を	の	校	れ	ん	三	三	だ	で	し	は	東	日	本	大	
た	ん	ん	の	み	し	の	さ	は	お	の	て	ず	言	言	ず	の	は	大	し	ん	さ	い	
の	で	あ	人	ず	と	ま	ん	は	く	の	び	が	わ	わ	が	に	く	し	の	お	も	い	
が	ち	さ	も	が	あ	え	の	は	る	く	く	ま	れ	れ	い	り	さ	し	の	い	い	い	
ら	ろ	ひ	い	ぜ	に	に	く	し	ま	ま	り	あ	ま	ま	っ	し	と	い	の	お	も	い	
で	う	る	ま	ん	あ	に	に	と	に	に	ま	っ	し	し	て	ま	い	の	と	き	に	福	
した	ぐ	ご	した	い	っ	た	て	い	が	い	っ	た	た	た	か	っ	て	福	田				
こ	ら	は	福	て	か	家	ま	ま	て	ま	ま	た	た	た	か	か	た	た					
わ	い	あ	小	よ	わ	は	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か					
か	ち	り	学	か	い	は	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か					
っ	ら	い	校	っ	い	な	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か					
た	ば	ち	に	た	さ	く	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た					
で	ん	ま	ひ	だ	さ	な	だ	だ	だ	だ	だ	だ	だ	だ	だ	だ	だ	だ					
ず	さ	か	た			り	で	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら					
						89	ず																

また そういうひがたいていいいききたときは、しりませんでしたか
 とうことがわかっただいす。つなみは、けつこうでつかつたです。
 つなみがきこいしんのなかをかわりました。つなみは一人をおそうし
 道路をわろくしたりするのかわりました。つなみは一人をおそうし
 かまんほうからみずかたりしました。つなみは一人をおそうし
 こんでまては、ほしくありませしがじしなきたうきぐにせいふるのたにま
 ることにしまさる。ほしくありませしがじしなきたうきぐにせいふるのたにま
 ぼいくしのできは、じしんのことほ、はかしたあったのではらうちい
 ます。しんりたは、くわうあないでたりたいとおもいます。

わたしは、保育所の年長組五さいの、三月
 十一日のおおかれ会が午前中に終りて、ケ－
 キを食^クべるためにお昼^クねが早く終り、三時の
 おやつ^クのケ－キを食^クべるじ^クんびせしている
 時は、強^クいゆれにおえおれしました。ケ－キは、
 ぐちやぐちやになり、先生のし^クじで外に出ま
 した。外に出たらすぐにぼうさいむせんがな
 りだし、みんなパニックじょうたいでした。
 今、少しずつふ、こうが見えています。
 すなを、運^クんだり、石を運^クんでいるダンプが
 多く走^クっています。じょうばん線の橋げたが
 見えるようにな^クてきました。
 これもふ、こうに、つながると思います。

わたしは、しんさいがあ、こがら、とこも
 くらんがこわくなしました。けれどもまたつ
 なみが来たときのために新地町は、海のちか
 くに、防災公園をつくることになりました。
 そしてそこに木を植るのに学校でもいざい
 た。大きく木がそだつこほしいと思ひました。
 あと、大きく木がそだたら、見に行きたは
 と思ひました。
 わたしのつるしのおばあちゃん、あの大
 きななみのせいでつるしのおばあちゃんの
 いえは、ながたれこしおしおした。
 もう大きいのなみがあほし女なと思ひお
 した

3年 名前 武琉 の

地しんの時、ほくは、お母さんとハッ月の
 弟と仙台の家に行きました。大きなゆねがきこ
 える形や本やいろいろな物が落ちこぼれたのび、
 お母さんに泣いたつの中にもぐりなごい。こい
 ちあ、大きな地しんや小さな地しんかのまの
 ぎにせんおさまのかわらぬみたら、部屋の
 中がぐちゃぐちゃでした。おぼつの人から、
 被害が来るからみんなあるように言われて用
 意していたら父がが、父の車に乗ってみんな
 入りました。高速道路のところに1時間ぐら
 いると南がわたり津波が来るのがめえたの
 び四号線近くまでいって、車の中を朝まで
 しました。食事も何もなくて、ガソリンもな
 かりなりのびおぼあや人の家に行けば、
 りおんのかんを救えたいと思っしおぼあや
 坂元が津波を避けて山道を回ったや。と
 おぼあや人の家に行きました。家族四人
 ことこの本巻に良かったあ。地しんでいり
 らうにわわわ、たけこ、福田小学校に入れ
 てもらったあ。

東日本大震災が、おきたときはまだ、
 ほんくよにいたころでした。とつぜん地
 震がな。こび。くいしました。えん庭に出て
 地しんがおさまるのを待ちました。えん庭か
 らほんくえんの中を見ると下しどやつくえや
 時計が落ちていたの。家はとつな。こいるの
 が心配しました。おじ、ちやんかむかえにま
 こくれました。家は、しよ。まがこ。ばに落
 ちてきて、あんなか。たてす。まだ地しんが
 おきた時、テーブルの下にかくれました。時
 計が落ちそうにな。たよりはさみやかた。こい
 た写真が落ちてました。すくく大まに地しんだ
 から水も出ませんでした。なの。こ外の水道を
 使いました。

ほんくは、これからの新地町は明るく平和に
 なってほしいです。おとつ波と地しんは、お
 きてほしくなっています。おきたらまだ、東日本
 大震災と同じ思いをしてしまつからです。

ほくは、ほいくしよに、いるときびしんがき
 てばあちやんがむかえにくるまで体育かんに
 ひなんしてしました。家にかえると家の中は
 物であるけなくなつていて電気も水もでなく
 夜は、ニわかつたです。お父さんとお母さん
 が帰つてきておと親^{おや}の家に行きじんま、山
 形にひなんしました。お父さんはじいじのた
 めお母さんと、弟と三人でくらしほいくえん
 にかよいました。友だちもいつぱいできました
 た。福田小学校に入るのでもどりました。
 また、福田の友だちとあそぶうれしがつたで
 す。
 じしんがくるとニわかじ家ぞくがばらばらに
 なつてしまいたびしいのできてほしくないで
 す。めんなで安^{やす}バしてあそぶる公園^{こうえん}ができる
 とうれしいです。

東日本大しんさいの たいけんだんと ふつこうぐのおもい

3年 名前 荒佑弥

ぼしは、しんさいのしぎ、ほいぐしぎで、
 ケーキを食^くるころでした。そのころは、ま
 だつなみとがもし、てませとてしなじしとも
 しりませんとでした。日本は~~豊~~金だと思^{おも}てい
 ました。そして、いさなりちいさいじしとが
 なのことなりでどたどたや^やつてるのがし思^{おも}い
 ました。でもせんせいたちは、ばをばたして
 て、おんがもにわが^わていしました。そして先
 生^{先生}が、つしえの下にむじりがさ^さいしとさけ
 びました。あわてつしえのしたにむじりこ
 とでどとどとこわしな^なてきました。なにが
 くるのがわが^わがなしてこわつたです。ころ
 ていばでえたいいしがとにい^いてまつてたが
 母^母さんがさました。おんがをみるしないてる
 とがいつお^おいりました。車^車で家^家にかえるし
 タンスとががいつお^おいれたました。そし
 て、しとちのばあちやとの家^家にしまえ車がが
 シリンにえたいとて言^いていこつしとけ
 ど行^行なせんとした。そのりゆうを問^問いてみ
 ると、がソリンに死^死んでた^たらながたれた

たいていしてました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

赤前 碧浩 氏名

ぼくは、押しつぶされたじいじのカーンがした
 た。でもくおぼえてしまふ。
 ぼしんやうな家が流れてたり、おんたりの
 しました。新しいおうちを建てなおしてしま
 す。ぼしんやうな家がなくなることにがっかりして
 りばおんたにげられるのにと、思っています。
 早くわかるようになってほしい。
 ◇

体験してあげたことは、電気もなくなり、不便
 だとゆうことです。

たたとえは、電気もかいと電化製品の使え
 なくか、てしまいます。梅はま、暗になつて
 しまつたり、あたたかい食べ物も食べあま
 せん。

地しんでたんずおたおれたりしたけど、家
 はこれをおったのでよかったと思ひました。

なぜかといつと電気もなくてもろうそくとス
 トーブといちゅう電もろがあつたおかげで
 少し明るかつたし、食事もおたためることで
 できました。でもあごんどぎどぎしていまし
 た。

東日本大じん災であつたことは、電気は
 生活にはおかせないものだと思ひました。お
 ねから地しんにそなえてほしいと思ひま
 す。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 佐藤 永流

「	東	日	本	大	震	災	の	体	験	談	と	復	興	へ	の	想	い	」				
わ	た	し	が	、	東	日	本	大	し	ん	災	を	体	け	ん	し	た	の				
は	、	保	存	所	に	い	ら	と	お	て	し	た	。									
じ	し	ん	が	お	き	た	と	お	立	っ	て	こ	ま	り	て	、	友	達				
の	お	兄	さん	に	お	ん	ぶ	し	て	な	ぐ	さ	め	ら	れ	て	も	、				
お	す	と	お	立	っ	て	こ	ま	り	た	の	お	ち	と	、	お	な	わ	い	を	か	
け	て	し	ま	し	ま	し	た	。														
で	も	、	度	に	、	お	お	ち	さん	や	、	お	お	な	え	ち	さん	、				
お	お	兄	さん	が	来	て	く	れ	た	の	で	わ	た	し	は	、	お	お	お	お	お	
と	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	
で	も	、	さ	ま	く	て	、	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	
し	た	。	が	、	先	に	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	
で	す	。	た	、	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	
な	し	し	、	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	
か	ら	で	す	。																		
二	日	目	は	、	本	を	よ	ん	だ	り	し	ま	し	た	。							
三	日	目	は	、	ま	り	、	本	を	よ	ん	だ	り	し	ま	し	た	。				

私は、しんさいがあつた時は、まだ、保育
 所の年長組でした。その日は、お楽しみ会で
 給食室にいました。その時すごく強い地しん
 で立っていられない位ゆれて、こわくて、こ
 わくて泣きました。

本当なら、こんなようかかれた体育館で
 お昼ねをしている時間でしたが、お楽しみ会
 のおかげで給食室にいたので命が助かりまし
 た。本当に良かったです。

しんさいがおきる前より、便利で住みやす
 い町にしてほしいです。

わたしは、大震災の時は、まだ、保育所の
 年長でした。3月11日は、わたしたちを送る
 お楽しみ会で、いつもより、早く起きてしま
 した。その時、給食室にいました。そして、
 地震がおき、テーブルの下に、かくれまし
 た。かくれていたら、本、本棚、テレビなど
 いろいろな物がたおれてきました。その時、
 わたしは、こんな大きい、地震、初めてだ
 ったので、少しこわかったです。そのあと、
 庭にいて、そのあと福田小の体育館にいな
 んしました。そしてみんな泣いて、笑顔でし
 た。それを見て、わたしも笑顔になりました。
 そして、自衛隊の方や先生方や地元の住民の
 方がいて、大震災があつて少しすぎた時には
 ボランティアの人たちがかしきをかたがけて
 くれたりしました。いろいろな学校からの、
 支援物資もとどきました。とても、勇気がけ
 られました。わたしは、元通りにほもどらな
 いけど少しは、元の新地町に戻れる様にな
 をかしてあげられれば、いいなと思います。

669

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 佐藤 文樹

ぼくはそのときほろくしよにりまてた。
 そのときおがえして、つぎは入るところでく
 たのそしこ5分くらいたってそのときいじん
 がおきてびびりして、したのほろくしよにた
 たてしにががちてたはもまちこびりく
 ましたのころ、つぎは「えて」はていじん
 しこたにもつがなち、たてすのりんのまがり
 たまじり、ちが、てましたのころ、たてすな

670

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 佐伯 崇 哉

ぼくは、あの2011年3月11日にあった
 ことは、おぼえられません。あの時、ぼくは
 ようちえんのじむ室か、家に帰るバスを、ま
 っていました。その時へかが大きくなり、はじ
 め、たなからパリコンサテレビがガタガタと
 いろいろな音が落ち、こっぴどまりました。そしたら外
 に出ても先生に言われて、外に出ました。他
 にも、たくさん生徒や先生が園の中央
 に集ま、ていました。しばらくすると、弟と
 姉をつれて、母がぶかえにきました。車に乗
 り、家に帰ろうとする時、海をいから来たた
 のこの車のおじいさんに津波が来た子からあぶ
 ないよと言われて、ようちえんにもどり、し
 ばらくたつと、おばあちゃんがおびにきて、
 こまかみ者のおばあちゃんの実家に行きまし
 た。そのことはおぼえられなくてもおぼえられ
 せん。

671 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 山崎実希

しんさいでこまったこと
 水がでないけど家に井戸があって、こまり
 ませんでした。お風呂のはい管がわれて、こ
 とこの家のお風呂をかりて、ひしひしに
 入ることができました。
 お店に商品がなくて、買うことができずに
 食べ物を買うのにくろうしました。
 じしんで、家の中が壊れていました。家に
 あった皿がこわれて、足もとにちりはっ
 たので、足もとにききをつけてあるくのがた
 めんでした。となりのへやは、ダンスがた
 めんのでとなりのへや
 で、すういっかんすこしました。
 わたしの卒園式がなくなりました。卒園式
 は、町やく場おこなわれて、テレビのしゅ
 いかうけて、はぶがしかったです。
 あれからは、もう三年上以たちましたが、
 このたいけんをわすれないようにして、み
 ないにもつなみのこわさをたえていきたい
 と思います。

(20文字 × 20行)

672

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 齋藤陽菜

わたしたちの住んでいる福島県はお店とか自然をいっぱいになれますようにしたいです。その理由は、お店をいっぱいにしたほうがいっぱいお客さんがいっぱいきてくださるからだと思います。

あと、自然をいっぱいにして福島県にしたいです。そして福島県がいっぱい大きくなってほしいと思いました。

もっといっぱいでいられるといいと思います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 小賀 坂 美 夢

673

二〇一一年三月十一日、わたしは、そのと
 先、ようち園生でした。初めて震災を体験し
 たわたしは、すごくびっくり、すごく不
 安でした。
 ーわたしが最初の地震を体験したのは、よう
 ち園のバスで家に向っているときでした。始
 めのゆれは、大きかったので、少し不安にな
 りました。わたしが家に着いて何分かしたと
 き、津波の第一波がせまってきたいました。
 そのときには、お母さんの車でコンビニエ
 ーセンターまでにげました。そして、第二波
 のときは、コンビニエーのちゆう車じょうの
 入り口までせまっていたので、すごくびっくりな
 りました。何分かした後、お父さんが来て、
 福田小学校の体育館ににげました。わたしは
 家に帰れるまで、すごく不安でした。家に帰れ
 るようになったときは、すごくうれしかった
 です。こんな悲しい出来事がありましたか、
 福島県にかぎらず、日本中が十日も早いふ
 二つができるように願っています。

674 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名

今野優香

東日本大震災の想い
 私は東日本大震災の時、じしんという
 ものが分からなかつたのでひくりました
 その後、なくなりました。人やゆくえぶ
 めいの人がい、はいました。そして家なくな
 なくしてしまつたのがとてもかわいそうてし
 た。でも私たちは、家族や友達がいとても
 幸せたと思います。つなみや、はうしゅせん
 で、家に入れなかつたり家がないう人もいるの
 でとてもかわいそうてす。
 だから私はそういう体験をして、これから
 家族や友達を大切に、その家をなくした
 人や、家に入れないう人もいるのでその人た
 ちの分も、勉強やうんどうをせいいっぱいがんば
 りたいです。
 これからその人なを助けをしなから、みんな
 ていさいです。

震災があつたときはわたしはほいく所に避難
 しました。大きな地震があつたときびくりに
 てあわててつぐらの中にもぐりこみました。
 一度はいえにかえ、てすぐに学校へいきました。
 た。そこにはすわれないほとんどの人がひな
 てりました。わたしはゆなちゃんの家族のし
 こりのとなりにあわりました。
 ちよとこめが、たけどかぞくをいれたから
 あんじんしました。
 二度とこんなはげしいことはおきてほしくな
 いです。

東日本大しんさいが起きた時、大きな長い
 地しんにびっくりして、そのあと家族や友達
 のことが心配になっ、てずっと泣きつづけてい
 ました。小学校の体育館へひなんをしたとき
 はなみだが止まりませんでした。だけど、友
 達がなぐさめてくれたし、みんながいるから
 安心しました。だけど、家に帰、てからテレ
 ビをみた時、つなみが新地町をのみこんでい
 るえいぞうがながれていて、お母さんに大き
 一きました。その後、何回も大しんが起き、
 こわくてふるえていました。
 今は、つなみがきた場所は、すっかり変わ
 っ、てしまいました。ぶ、このためにみんな
 で、どんぐりのなえを植えに行きました。
 また、福島県では放射線の問題がありま
 す。自然のたくさんある福島県が元にもど、り、
 ぶ、こうしてみんなの元気をとりもどしてほ
 しいなと思いました。
 そして、昔、私が小さい時に遊んだ海で、
 妹と貝ひろいをしてたりした思い出がありました。

東日本大震災から3年11カ月がたちました。
ぼくは、まだ小土がつたけど、今もあの時の
ことは、昨日のここのようにおぼえています。
あの時ぼくは、保育園にいました。わねがお
さまった後、みんなで校庭に しました。
ぼくのお父さんが、一番先に保育園に来てく
れた時は、ホットしました。あ、ちこっちで
サイレンがなりひびいていて、とてもこわか
った大震災でした。さらに原発の問題もある
ので復興するには、ほど遠いけど、この先ど
うなるのがぼくにもわかりません。でも、み
んなが元気になって、安心してくらせる町に
何年かかってもなつてほしいです。ぼくが、
もう少し大きくなったら、ボランティアなど
をして、少しでも役にたちたいと思います。

東日本大震災の時、大切な物がうばり取ま
 した。みんなの笑顔、そして命。ぼくは、そ
 の時、学校にいました。そのとき急に、「か
 タカタ」と言われました。そうしたら先生が
 「つく之下にもぐりなさい」と
 言いました。ぼくたちはみんな、手をなぐ
 り、つく之下にもぐりました。ランドセル
 がおちたり、先生もた、ていんがなにくら
 びました。そうしたら、地しゃが止まり、お
 ちの人が向かいにきてぼくはここを安心しま
 した。車に乗った。道路がひびかきもど
 きました。家についたら、家の前に地しゃの人
 たちがいました。ぼくは、「お人ななな？」と
 にいる人を「うん」と思いました。そうして家
 の中に入らうとすると、けんかんに、ガラス、
 花壇がにお、こつてありました。ランドセル
 を外におき、山に行きました。そうしたら
 こもびくりました。家が壊さず、みんな
 のおまも流さずぼくは頭の中が真っ白に
 ました。早く笑顔ほびか、もどりまよ

震災の時ぼくは神奈川県に住んでいて、それほど大きな被害はありませんでした。
 ゆいいつ被害と言えは、友達のお父さんの車にブロックバインがたおれてきて一人だことくらいでした。ところが、時間が経つにつれておじいちゃんや連絡がとれなかつたり、テレビのニュースで色々な被害の様子を見て、大変なことがおきているんだと知りました。
 実際に新地に来たのは、だいぶたつてからでした。海を近くを見たら、しきがつまらなくて震災はすごく大変だと分かりました。神奈川県とは全然ちがう様子でした。
 神奈川県から引、こしてだいぶしきがなくなつていました。福田の小学校に行く前は、まだ震災のことをずいと思つていて元気がないのかと思つていました。でも福田の人は元気で笑顔がいっぱいでした。こちらに来て思つたことは、東北の人が笑顔と元気がいっぱいになつてほしい、住みやすい町、日本になつてほしいと思つていました。

680

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 三宅悠也

1. ぼくが1年生の時に東日本大しん災がありました。初めは、地ごとび、いきなり強いゆ木かきました。ほかにも泣く人なびがいました。ぼくもとてもこわくて家のことが心配になりました。かえりにいまらう人があかえにきて家かぶじだつたのでよか、たびす。

2. ぼくは、ぼくが来る人じ、又いかと心配しました。そして10分後かいらしたうたうたかきました。まあとまに、とてもこわくてまかにいきました。みかたすか、たのでよか、たびす。

3. そして今は、いろいろとが木をかむをかた下げ、急ぎで家をまた建ててい、こうしていのので、たんとたんとびをりるこもか分かります。しんさいで死んだ人をたたく人います。たか、しんさいじぶんか、たのは、命の大切さや、アタマ、じんかきとまの神慮なとか分かりました。このしんさいでまふんだうとかたたく人あ、のびこ木か、まそ木をたうと書えていまたいびす。

(20文字 × 20行)

〇東日本大震災は、まさに、教室が
 ゆらぎ、二枚は、じしんがとまをり、つとえ
 に、とどりました。そして、だんだんつとえ
 りあわが、つとえりて、かすしん人の、おぼあ
 ちや人が、か、こころまで、みまもって
 ーといつてきました。ほくは、そのいしん
 は、初めにのけりて人を、とて、こ
 こわくを、つとえました。
 のなみかしてとれわめていたので、たげない
 心、しまわって、ふるぎてこころにたげ、
 て、こころをまもしてたので、こころも
 ーかきました。まてこころいしんかまを
 へ、ちやんと、いしんをまもしてました。
 こころをまもりました。

682

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 櫻山玉浩

ぼくは東日本大震災ではあちゅんと母の姉
 をうしなっていました。そのときにはじょうかん
 だと思いました。でも遺体をみちどきにすご
 く泣いてしまいました。すごくお世話にな
 っていました。見くさんの思いでがりました。
 そのぶんぼくは、なくな、た人のぶんも幸せ
 に長生きしたいとおもいます。

ぼくのいとは宮城県の上荒町に住んでい
 ます。家は津波でこわされていきました。小学
 校の教室にひなんしてりました。ぼくは両親
 といっしょに会いにいきました。そこは電気
 のかわりにろうそく、飲み水は、給水車が采
 っていました。トイレはプールの水で流してい
 ました。ふとんのかわりに、マット運動のマ
 ットをつかっていた。ぼくは少しの間い
 ただけでしたが、とても幸そうに見えました
 ぼくは今、電気も、水も、不自由なく使
 っています。でもしん災のときのことを忘れず
 にしげんを大切に、そして子孫に伝えていき
 たいと思います。

ぼくが、震災で体験したことば、大ききい
 し人のあと、つなみがきてた。アノでした。
 でも、ほかの人も、震災で「アノ」ことになっ
 ているのに、いままで福島を支え人してくれま
 した。
 ぼくの家は、海舟り遠かったので、まだ、な
 にかおこっているのかしらなかつたけど、そ
 のあと、家の人に会いにおどろきました。
 その時のことは、まぐろては、なにか、
 ほかの国から、色々な、支え人物しをもらっ
 たのは、覚えています。
 今は、福島県とつなぐ興するの、小さがことし
 がでさ存いけれど、しょう来大きくなつたら、
 小さがことでも、一つ一つつなぐ、つなぐ
 ように、が人づつたりさたりです。
 しょう来のためには、今から、一つ一つ人づ
 つたりつなぐたいです。
 つなぐ一つをがる ようか人づつたりたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 荒 泰輝

この日の夜、ぼくは、学校にいて、学校の
 授業中に地震がありました。すぐに机にも
 ぐり地しんがぶたさるのを、こいました。
 地しんがぶたさ、て、げげしく、て、祖父が
 向か女に來ました。事で、家に帰る最に野放
 送で、大津波警報が、あ、て、ぼくは、あ、ま、こ、い
 ました。
 家に、つ、いて、ぼくと兄は、落ち、て、あ、く、て、
 外に出、て、い、ま、し、た。すると、町内、放、つ、て、あ、
 の、辺、く、ま、で、津、波、が、あ、て、い、る、の、を、聞、き、て、ぼ、く、た、
 ち、は、上、ら、上、に、お、る、墓、地、に、逃、げ、ま、し、た。墓、
 地、か、ら、母、と、兄、が、津、波、に、飲、ま、れ、ま、し、た、と、い、う、の、
 を、聞、き、ま、し、た。と、こ、も、恐、ろ、し、が、た、で、す。
 家、に、も、ど、り、と、な、り、の、家、か、ら、水、を、あ、ら、い、
 家は、ガ、ス、が、大、火、を、た、し、た、の、で、フ、ー、メ、ン、を
 作、り、ま、し、た、が、ぼ、く、は、一、つ、も、命、を、あ、ら、ま、せ、ん
 じ、た。機、に、は、い、く、ニ、ド、フ、布、団、を、あ、き、ま、し、た。
 目、が、あ、る、と、は、か、な、つ、て、い、て、父、と、い、い、し
 る、に、ひ、な、ん、所、に、行、き、母、と、再、會、し、ま、し、た。家、
 が、た、ま、も、死、な、な、い、と、本、当、に、良、か、た、で、す。

685 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 渡部 友里

けたしは、「防災緑地公園」が早くできて
 ほしいです。理由は、一、目は
 防災緑地公園ができれば、新地町に人が遊び
 に来ると、人が増えていって、さらにもっといい町に
 できるかもしれないからです。二、目は、防
 災緑地公園ができていたら、もしまた大きな
 津波が来るとしても、公園の木々たちがみ
 んなのことを守ってくれるからです。三、目
 は、公園には遊具がたくさんあり、子どもた
 ちが適度な運動を楽しくできるからです。
 四、目は、公園の中に「ステージ」みたいなよう
 なものができると、大人も子どもも一緒に
 楽しめるので早くできてほしいです。
 このような理由で、「防災緑地公園」が早く
 できてほしいです。

わたしは、新地駅が早くできてほしいなと
 思います。駅ができれば、今までよりも便利
 になるし、いろいろな町に行けるからです。
 それに、新地町にも今よりは人が来てくれる
 と思います。わたしが一年生のころは学校へ
 行く時と学校から家に帰る時に、ふみきりを
 通っていました。今、その場所は何も物が無
 い、ただの道路になっていました。もう一度、
 ふみきりで電車が走っているところを見たい
 たいです。それから、災害復興住宅をどんど
 ん建ててほしいです。わたしの家族は
 東日本大震災で家を流されてしまい、今年の
 3月ごろに新しい家に住み始める予定です。
 でも、家がなくな、た人の中には、お金の問
 題などで家を建てられない人もいますはず
 ですから、災害復興住宅に住んで広々とした空
 間ですごしてほしいです。新地駅や災害復興
 住宅ができたら前より人が来ると思うので、
 にぎやかに楽しくくらしたいと思います。

687

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 林 美花

東日本大震災の時に私の家では屋根のかわ
らがおちただけでした。しかし、新地町を見
てみると、木がおち、かねさか山のようにあ
りました。他に、津波で家が流されたり、た
くさんの人々がおなくなったりした
りしました。私のクラスの友達にも家を流されてしま
った人がいます。代わを受けつかれた家なのに
津波で流されて、悲しい気持ちでいっぱい
でした。でも友達の命は助かったのびきせきか
おこ。た、ようびきづくうれしか、たびす。

東日本大震災から四年がたちました。新地
町には、防災緑地公園や、駅や、線路が建設
工事がおこなわれしています。早く完成して、
安全でみんなが楽しくくらすようになって
ほしいと思います。

私の友達はまだ仮設住宅に住んでいて、二
月に新しい家かびきを引こしをするそうです。
自分の部屋かびきると喜んでいました。他の
仮設に住んでいる方も全員が友達のように
早く安心して住めるようになってほしいです。

688 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 林 香花

「津波でこんなにも、何もなくなるものなのた
 ろうか」と、どんぐりプロジェクトで海岸の
 公園予定地に行、た時に感じたことです。
 どんぐりプロジェクトとは、どんぐりを植
 え、防潮林を育てることです。
 その時は、どんぐりの苗をやさしく土にか
 ぶせて「私が大人にな、た時には、このどん
 ぐりの木が大きく育、て、防災緑地公園も完
 成してるとたろうな」と心の中で思いました。
 この経験をもとに私が思、たことは、私達が
 大きく育、ていくに違、た。この新地町も進
 化していくと思います。そして防災緑地公園
 が完成し、子供は楽しく元気に遊び、大人の
 人達も楽しめる緑地公園になり、新地町のは
 じからはじまで笑い声があふき新地町の人々、
 1人1人が1日に何回も笑顔になるような町
 にな、てほしいです。そして、福島県1の笑
 顔な町になるように私はボランティア活動や
 ほ金活動に参加して、新地町が笑顔あふめる
 町になると願、ています。

(20文字 × 20行)

東日本大震災は、小学校1年生の時にしました。
 とつ然の地震でこわが、たです。私は兄の友
 達のお母さんが、学校にむかえに来てくれた
 ので兄と、友達の家と近くのコミュニティ
 センターにひな人しました。兄と手をつなぎ
 友達のお母さんに、「大丈夫だよ」と言われて
 母が来るのを待ちました。津波が来て目の前
 の田んぼに家や車、がれきりが流されて来て、
 友達のお父さんに「ここまで来たら車をボート
 がわりにするぞ」と言われ、とても不安でし
 ました。その友達の家は、津波で流された次の日に
 名古屋市にひな人しました。とても仲よくし
 ていたのを別れる時は、とてもさびしかったです。
 私は不安でいる時、友達の爺さんが一緒に
 にいてくれてとても感謝しています。また
 全国から、色々な物資や助けの手紙を届
 けてくれてとても感謝しています。さうい
 う時と、乗りこえさせる大人になり、困って
 いる人がいたら、助けを求める人になり、まえ
 てくれた人達に恩がえりしたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 金鈴木 舜吾

3、11、そのときぼくは学校で帰りの会を行
 っていました。ぼくはランドセルをロッカー
 から出して道具箱から教科書だしたそのとき
 2時46分とつぜん大地震が発生しまし
 ました。長い時間ゆれつづけました。そしてぼく
 はみんなと一緒に校庭へと逃げました。しば
 らくすると、親がまかえにきました。6号線
 を渡ると、沿岸に住む家で山の方へ逃げるで
 とい声がありました。そしてぼくの家へもどろ
 つとしたとき、6号線の道の下の方で津波を
 見ました。黒くにこった波が6号線に入っ
 てきました。ぼくたちは急いで山の方へ車でにげ
 ました。ぼくたちは後数秒遅れていたら、命
 はなかったでしょう。ぼくたちはいそいで山
 の方へにげました。がまだ安心できませんでし
 た。そして、1日たった、町は戦争であらさ
 れた。西なみのようでした。それから長月がた
 ち、11から4年たちました。ぼくは明るい
 未来にして平和なまちにしたいです。

691

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 大観 彩音

その地しんがおきた時、私は、学校に行ま
 した。大きい地しんは、初めてなのでこわか
 ったです。地しんの後、お父さんが迎えに来
 て近くの高台にひなんしました。

私の家は、屋根のかわらが落ちたり、食器
 だながたおれたり、家の中はめっちゃめっちゃで
 いたが、電気などは、ついていました。その
 日の夜は、お父さんの車の中で家族みんなで
 ねました。でも、まだ地しんが何回もあって
 よくねおれませんでした。次の日に知ったの
 は、家がこわれたり、津波で家がなくなっ
 ていました。たくさんの方がなくなりました。

原発事故もあり、私たち家族は、その後山
 形にひなんしました。

これから望む事は、みんなが安心して住め
 るような町になってほしいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 小里 優

ぼくは、三月十一日東日本大震災がおきました。
 そのときは、二年生のころでした。その
 ときは、がえりの会をやっているところでした。
 た。その日に、大玉のめがとおきました。
 ぼくは、どうしようと思いましたが、机が
 机の下にかくれたいと言いました。だから、机
 の下にかくれました。どろどろと大玉のめが
 はげしくなりました。どろどろと大玉のめが
 がふるふてきました。おさまりました。先生
 が、体育館にひびくして、だから、机
 にも体育館にひびくしました。体育館で、す
 れていて、六年生が、「おめえ」と言
 きました。全校生が、がえりたちにおかえりが
 きました。ぼくのがえり、どろどろと大玉のめ
 がかりました。だから、福田ぼく、くい
 のちやうしやじやうにいひたきに、ぼくの
 がえりがいきました。で、おめえちやんが
 のめとめられました。だから、はやく車に
 のって、家におかいました。家の中は、上
 しがひくくりかへてきました。ぼくは、

うからたでした。

693 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 野 俊 樹

東日本大震災の復興への想い									
ぼくは、3月11日に起きた東日本大震災									
のときは、まだ2年生のころでした。									
だから、最初は、なにかおこったのか分り									
ませんでした。みんなは、山がばくはつし									
たのかと、とって置いておいてきもちが									
おちつきませんでした。そして、まとか									
ら、だんだん、じよきよがわがってきま									
った。やっぱり最初は、震度5強だった									
のとかがまじまじと分りませんでした。									
そして、家族が、友達、新友、いとこ、はと									
こ、それぞれなくした家族は、とてもかた									
く、ぼくたちにとって、ものすごく悲しい									
んだなあと分りました。それほど、とって									
も家族が、いとこ、はとこ、友達、新友とい									
うのは、だまにた、と大切な、大切な、仲間									
ないかなと分りました。									
これからも家族がいとこ、はとこ、新友、									
友達のことを、しんじていきたいと思います。									
がんばり続けたいみんなもがんばってほしい。									

(20文字 × 20行)

私け、あの日3月11日にあんなおそろしい
 事が起こるなんて思いませんでした。あの日
 日は、いつも通りに登校し、いつも通り授業
 をしていましたが。2時46分、あの大きな地
 震が急におこりました。当時2年生だ。下校
 け生まれ初めての大正11年地震で何がおきた
 のか分からずじっとしてしまいました。たんだ
 ん大きなゆれに。ていっくになつた。不安も高
 まってしまいました。家族や家みんなが心酔して
 いた。お母さんが学校におかえに来て家に帰る
 と、自分の靴や鏡はすんらんしていて、床が
 見えにくいから物は落ちてしまいました。数日後
 下校は、お父さんとい、しよに津波が来たとい
 こりに行、てみました。前の町とは全然ちが
 う、あとかたも無くなくなる。てしまいました。
 こんなにもあ、けなく終わ、てしまふとも思
 いませんでした。私は、あの日のことを
 絶対に忘れないでいよう。

695

「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 吉田 遥香

私は東日本大震災の時、学校にいました。
 その日は金曜日で、「ああ、明日は休みだ！
 楽しみだなあ」と、思っていました。しかし、
 帰る準備をしてすわっていた時、ガタガタッ
 と学校がゆれました。すぐに机の下に隠れま
 した。机がゆれ、物が落ち、とてもこわかっ
 たです。そして、すぐに体育館へ行きました。
 津波が来るかさしれないので、また、高台へ
 ひなんしました。高台についてほっとしたの
 ですが、会社にいるお父さんは大丈夫だろう
 か。家にいる家族は無事だろうか。三つぐな
 っ、てしまい、泣いてしまいました。学校まで
 津波は来ず、家と流されていませんでした。
 ですが、家の中はメチャクチャで、車の中で
 すごくすしかありませんでした。次の日、テレビ
 などで初めて原発を知りました。津波の情報も。
 海辺も流されてなにともなくて、すこくかなし
 い気持ちになりましたが、他県の人達が物資
 をたくさんくれて、とても嬉しくなりました。
 でも、震災はどう無いでほしいです。

私	が	東	日	本	大	震	災	で	体	験	し	た	事	。							
そ	の	は	、	大	き	な	津	波	で	す	。	地	震	の	後	、	何	分	か		
し	て	、	体	育	館	に	逃	げ	て	き	た	ら	、	校	長	先	生	が	「		
津	波	が	来	て	る	!!	、	と	言	い	ま	し	た	。							
そ	し	て	、	み	ん	な	で	近	く	の	高	台	の	公	園	へ	行	き	ま		
し	た	。	そ	し	て	少	し	す	る	と	雪	が	降	、	て	来	ま	し	た	。	
す	こ	く	寒	く	て	、	大	変	で	し	た	。									
何	分	か	し	た	ら	、	お	母	さ	ん	と	お	父	さ	ん	が	迎	え	に		
来	て	く	れ	て	、	角	田	の	ば	あ	ち	ゃ	ん	の	家	へ	行	き	ま		
し	た	。																			
ば	あ	ち	ゃ	ん	の	家	で	は	、	ガ	ラ	ス	が	た	く	さ	ん	割	れ		
て	い	て	、	掃	除	す	る	の	も	一	苦	勞	で	し	た	。					
ふ	と	テ	レ	ビ	を	つ	け	た	ら	、	た	く	さ	ん	の	人	が	死			
ん	で	た	り	、	行	方	不	明	の	人	が	た	く	さ	ん	い	た	の	で		
び	、	く	り	し	ま	し	た	。	私	は	生	き	て	て	よ	か	、	た	と		
思	い	ま	し	た																	
復	興	へ	の	思	い	。															
そ	の	は	、	津	波	で	す	べ	て	の	物	が	壊	れ	ま	し	た	。			
そ	の	で	た	く	さ	ん	の	人	も	死	ん	で	し	ま	っ	た	の	で	、		
元	ど	う	り	に	建	物	を	作	り	直	し	て	も	ら	い	た	い	い	で	す	。

697 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 林 風花

3月11日の東日本大震災から約4年た、
 今、復興に向けて、いろいろな作業が佳人
 であります。私は、その中の一つのどんぐりフ
 ロジェクトというものに参加しました。どん
 ぐりプロジェクトとは、津波でなく、木
 がたくさくあります。それをおきなおすために
 どんぐりの木を植えるプロジェクトです。ど
 んぐりを植えた場所は、新地町です。そこは
 公園になる予定です。公園の名前は、防災緑
 地公園です。ここは、何年かかけてしょうぶ
 な木を育ててくれるところです。あと10年
 ほどたてば、緑みられる公園となり、人がい
 ばい集まる公園になると思います。その時は、
 津波から新地町を守ってくれる公園になっ
 ていると思います。

698 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 加藤 元樹

東	日	本	大	震	災	の	復	興	へ	の	想	い	。						
ほ	く	は	、	東	日	本	大	震	災	の	日	に	す	こ	く	こ	わ	り	体
験	を	し	ま	し	た	。	く	年	生	教	室	で	受	け	ら	う	を	し	て
た	ら	ま	た	う	に	、	地	震	が	お	き	こ	す	こ	に	つ	く	ま	の
下	に	か	く	れ	ま	し	た	。	そ	し	て	う	ち	へ	ま	だ	と	公	園
に	に	か	ま	し	た	。	今	は	ま	た	復	興	は	、	進	ん	で	い	ま
が	ん	が	、	一	月	で	も	早	く	元	の	新	地	町	た	と	り	た	
い	ど	う	。																

震災の時、ぼくは2年生でした。帰りの準備
 をしている途中で、地震がおきました。先
 生の指示にしたがって机の下にもくっちは出
 てをくりがえしたけど、校内放送で体育館へ
 避難してくださいと言われて避難しました。
 しばらくするとお家の人がおかえにきて、家
 に帰りました。家に入ってみると食器棚から
 食器がおちて、床に破へんがおちていました。
 津波が来ると聞いて、避難しようとしたけど
 自分の家までは、来ないと思って家の中へも
 とりました。津波の被害は大きく浜の人の家
 は流され、新地駅も流れました。あれから3
 年、家を流された人は家をたてて、仮設住宅
 から出ています。高速道路が開通し、新地駅
 もたてる場所が決って、工事が始まり、少しづ
 つ復興が進んでいきます。これからの新地町は
 明るくて住みやすい町NO1に選れるように
 ぼくたちが平和な町づくりをしていきたいで
 す。

東日本大震災、3月11日朝はその時2
 年生でした。2:46分その5分前ほくは、
 帰りの準備のしたくをしていました。そして
 帰りの会が始まって、5分後くらいに終り
 ました。そして先生の話が終りて、帰りの
 あいさつをしようとしたしゃん感。とつせへ
 コーヒーときゅうに自然ソがして、その2秒後
 ぐらいにコォコォコォコォコォと、そのまご
 く大さな地しんがきてころびそうにたりまし
 た。そのあつ木の下のにもぐりこぼれに大きくゆめ
 ち。ほくは、こおくとりました。そしてその
 何十秒が後にゆめがおさまりました。どがく
 の大さなゆめは今日も続いて、ゆめがおさま
 ち。みんなで体育館ににげました。体育館に
 いった時に少し、け、としました。ほくは、
 こうゆう経験をした事によって、少し心が変
 えたかと思ひます。

しんがで復興してたい町や村などのみなさん
 つぶせ家を流された人のみなさん今は立ち上
 るらあ、ついに全進して下さい。

701 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 横尾 晟希

ぼくは東日本大震災からの復興への想いが
あります。

それは、できるだけ早く復興してほしいと
いうことです。その理由は二つあります。

一つ目は、ぼくの住んでいる新地町は海と
山が近くて、自然豊かなところだと思っ
ています。ですが、東日本大震災の時の津波で海
のちは悲惨な事になってしまいました。だか
ら、早く復旧して、また新地町のいいところ
にもどしてほしいと思います。そうすれば、
また町がにぎやかうと思います。

二つ目は、原発事故のせいで故郷から出て
行くしかなか。た人達、津波のせいで家が流
されて仮設住宅に住んでいる人達が非しむと
ころをテレビ等でたくさん見えました。そ
んな人達が少しでも早く元の場所へ元のくら
しができるように早く復興してほしいと思
います。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 深谷 里乃

わたしには、東日本大震災で、くわしい体験をたくさんしました。

一番苦しかったことは、ぎせいになっ。てしま。た人たちのこと。わたしは、いつもな。く。な。って。しま。た人が悪いわけではないの。に、こんなめに合わないといけ。ないの。だ。う。う。とい。つ。も。馬。い。ま。す。

わたしの家は、郡山市だ。た。の。で、つ。る。み。の。み。が。い。は。急。が。た。け。れ。く。も、当。時。よ。う。ち。に。行。っ。て。い。た。の。で、よ。う。ち。の。友。達。は、す。ぐ。く、は。げ。し。く。な。い。で。い。ま。し。た、わたしは、心。配。を。か。け。た。く。ち。が。た。の。で。な。け。ま。せ。ん。で。し。た。が、も。う。な。ぎ。た。い。く。ら。い。で。し。た。

も。う。何。年。も。た。っ。て。し。ま。い。ま。し。た。が、わ。す。れ。て。い。る。人。は、い。な。い。は。ず。で。す。生。き。残。れ。た。人。は、な。く。て。し。ま。っ。た。人。の。ぶ。ん。も、た。く。さ。ん。元。気。に。ま。き。て。い。け。た。ら。と。思。い。ま。す。い。つ。か。は。今。ま。で。と。同。し。よ。う。な。生。活。が。お。く。れ。る。よ。う。に。な。る。と。い。い。で。す。

703 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿 氏名 若林 朋佳

東	日	本	大	震	災	で	、	わ	た	し	は	命	の	大	切	さ	を	知	
り	ま	し	た	。															
大	震	災	の	こ	ろ	、	わ	た	し	は	よ	う	ち	園	に	通	っ	て	
い	た	年	長	さ	ん	で	し	た	。	そ	の	日	は	ピ	ア	ノ	の	お	け
い	こ	で	よ	う	ち	園	に	残	っ	て	い	ま	し	た	。	ち	ょう	ど	
お	け	い	こ	が	終	わ	り	、	お	母	さ	ん	が	待	っ	て	い	た	の
で	ろ	う	下	へ	行	っ	て												
「	先	に	く	つ	は	い	て	る	ね	。」									
と	言	っ	て	玄	関	へ	行	き	ま	し	た	。	そ	の	と	中	で	じ	し
ん	が	お	き	ま	し	た	。	こ	ん	な	こ	と	は	初	め	て	で	、	そ
れ	に	一	人	だ	っ	た	の	で	「	外	に	逃	げ	よ	う	。」	と	思	っ
て	靴	を	取	り	に	行	こ	う	と	し	ま	し	た	。	で	も	、	ま	だ
じ	し	ん	が	続	い	て	い	た	の	で	下	駄	箱	が	倒	れ	て	き	ま
し	た	。	そ	こ	で	、	先	生	が	手	を	伸	ば	し	て	助	け	て	く
れ	ま	し	た	。															
わ	た	し	は	、	先	生	に	助	け	ら	れ	て	け	が	は	負	い	ま	
せ	ん	で	し	た	が	、	必	ず	誰	か	が	助	け	て	く	れ	る	わ	け
で	は	な	い	の	で	、	あ	の	時	の	こ	と	を	思	い	出	す	と	心
が	ぎ	ゅ	っ	と	痛	く	な	り	ま	す	。	早	く	ふ	っ	こ	う	し	て
み	ん	な	の	笑	顔	が	戻	る	と	い	い	で	す	。					

震	災	か	ら	三	年	が	た	ち	、	私	は	、	六	年	生	に	な	り	
ま	し	た	。	確	か	に	、	以	前	に	比	べ	た	ら	復	興	が	進	ん
で	い	る	こ	と	は	間	違	い	な	い	で	す	が	、	福	島	は	ま	だ
ま	だ	の	と	こ	ろ	も	た	く	さ	ん	あ	る	と	感	じ	ま	す	。	そ
ん	な	中	、	最	近	で	は	、	物	の	支	援	と	い	う	よ	り	も	、
福	島	復	興	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	〇	〇	ス	ポ	ー	ツ	大	会	と	か
福	島	が	ん	ば	れ	〇	〇	グ	ラ	ン	プ	リ	な	ど	、	形	を	変	え
て	支	援	を	い	た	だ	い	て	い	ま	す	。	私	は	、	物	も	必	要
だ	け	れ	ど	、	困	っ	て	い	る	福	島	の	人	を	何	と	か	元	気
に	し	よ	う	と	い	う	全	国	の	人	々	の	気	持	ち	に	感	謝	し
て	い	ま	す	。															
こ	れ	か	ら	私	は	、	大	震	災	で	受	け	た	い	ろ	い	ろ	な	
人	か	ら	の	恩	を	何	ら	か	の	形	で	返	し	て	い	け	た	ら	な
と	考	え	て	い	ま	す	。	先	日	は	、	募	金	活	動	に	参	加	し
ま	し	た	が	、	ま	だ	ま	だ	で	き	る	こ	と	は	た	く	さ	ん	あ
る	と	思	い	ま	す	。	た	ぶ	ん	、	私	が	で	き	る	事	は	小	さ
な	事	だ	と	思	い	ま	す	が	、	小	さ	な	事	で	も	自	分	か	ら
進	ん	で	や	っ	て	い	き	た	い	で	す	。							

705

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 大平 俊弥

僕	は	、	東	日	本	大	震	災	の	時	、	学	校	で	帰	り	の	会		
を	し	て	い	ま	し	た	。	そ	の	時	、	突	然	大	き	く	揺	れ	ま	
し	た	。	最	初	は	、	い	つ	も	の	よ	う	な	大	き	く	て	も	短	
い	時	間	で	収	ま	る	も	の	だ	と	思	っ	て	い	ま	し	た	。	で	
も	、	揺	れ	て	い	る	の	は	一	分	以	上	続	き	、	だ	ん	だ	ん	
恐	ろ	し	く	な	っ	て	い	き	ま	し	た	。	少	し	し	て	、	揺	れ	
は	小	さ	く	な	っ	た	け	ど	、	ま	た	す	ぐ	に	、	さ	っ	き	よ	
り	大	き	な	揺	れ	が	来	ま	し	た	。	ほ	く	は	、	そ	の	と	き	
本	当	に	怖	く	て	泣	い	た	り	し	て	い	た	の	か	も	し	れ	ま	
せ	ん	。	地	震	の	間	に	花	瓶	は	割	れ	た	り	、	蛍	光	灯	が	
落	ち	た	り	し	て	大	変	で	し	た	。	避	難	す	る	と	き	、	荷	
物	の	ほ	う	は	だ	い	たい	用	意	で	き	て	い	た	け	ど	、	一		
部	置	い	て	い	っ	て	し	ま	い	、	春	休	み	中	結	構	苦	労	し	
ま	し	た	。	今	は	、	ほ	と	ん	ど	建	物	も	直	っ	て	、	結	構	
楽	し	く	毎	日	の	生	活	を	送	っ	て	い	ま	す	。	で	も	、	二	
ユ	ー	ス	で	他	の	地	域	を	見	て	い	る	と	、	や	は	り	、	震	
災	の	影	響	は	ま	だ	残	っ	て	い	る	な	、	と	感	じ	て	い	ま	
す	。																			
被	災	し	た	す	べ	て	の	地	域	が	、	昔	の	よ	う	に	楽	し		
く	生	活	が	で	き	る	日	が	来	る	こ	と	を	願	っ	て	い	ま	す	。

(20文字 × 20行)

ガ	ッ	シ	ャ	ン	、	バ	タ	ン	、	バ	タ	ン	。	私	は	、	小	学		
校	に	い	た	。	地	震	が	お	さ	ま	り	、	コ	ン	ク	リ	ー	ト	の	
破	片	が	ぼ	ろ	ぼ	ろ	落	ち	て	い	る	廊	下	を	歩	い	て	外	に	
避	難	し	た	が	、	窓	が	割	れ	、	校	庭	も	地	割	れ	が	ひ	ど	
く	、	学	校	は	崩	壊	寸	前	だ	っ	た	。								
何	日	か	経	つ	と	、	原	発	の	方	が	地	震	よ	り	も	大	き		
な	問	題	と	な	り	、	「	日	本	」	と	し	て	も	変	え	ら	れ	な	
い	事	実	だ	っ	た	。	よ	っ	て	、	福	島	へ	の	風	評	被	害	が	
ひ	ど	く	な	り	、	た	く	さ	ん	の	人	に	影	響	を	及	ぼ	し	た	。
現	在	、	福	島	が	か	か	え	て	い	る	問	題	は	数	知	れ	な		
い	。	が	ん	の	検	査	を	学	校	で	や	っ	た	り	、	野	菜	な	ど	
の	放	射	性	物	質	を	確	認	し	た	り	す	る	な	ど	、	徹	底	的	
に	調	べ	て	い	る	。	し	か	し	、	新	た	な	問	題	に	直	面	し	
て	い	る	。	そ	れ	は	、	女	戦	で	出	た	土	を	ど	こ	で	処	理	
す	る	か	だ	。	福	島	県	内	の	市	町	村	で	さ	え	、	い	や	だ	
と	思	い	な	が	ら	、	受	け	入	れ	て	い	る	。	ニ	ュ	ー	ス	を	
見	な	が	ら	私	は	こ	う	思	う	。	い	や	な	の	は	、	皆	同	じ	。
学	校	で	も	職	場	で	も	、	い	や	な	役	が	あ	る	。	し	か	し	、
必	要	だ	か	ら	あ	る	の	だ	と	。	皆	で	い	や	な	役	を	や	れ	
ば	、	い	つ	し	か	良	い	方	向	へ	向	か	う	と	、	私	は	思	う	。

707 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿 氏名 渡邊 歩

僕は、その日のその時間	は帰りの会をして
いました。そのとき、地震	が来しました。学校の
壁がぼろぼろ崩れ落ち、	机の上に置いてい
た筆箱などが、床に落ち	たりしていました。
避難のために外へ出まし	たが、外はサッカ
ーゴールが崩れていたり、	ライトが倒れてい
たり、ひび割れている地	面が見えたりと、と
ても荒れ果てた状況でし	た。
その後、家に帰って、こ	はんは炊くことが
できたので食べて寝まし	た。
僕はもう少し復興には力	を入れた方がいい
と思います。最初は、い	ろいろな言葉が出
てきましたが、今では、	テレビでも昔のよ
うに報道される機会も	少なくなっています。
最初の被害を受けた人も	、今回の震災を経
験していない人も、同	じ日本人として忘
れずにいてほしいです。	そして、これから
も起こる災害にも今	回の経験を忘れず
に語り継ぐことが、	復興の一つだと感
じています。	

あ の 、 忘 れ ら れ な い 大 震 災 。 私 が 、 学 校 で
帰 り の 会 を や っ て い た と き で し た 。 突 然 地 面
が 揺 れ た の で す 。 み ん な は 、 机 の 下 に 隠 れ ま
し た が 、 地 震 は 、 い っ こ う に 止 ま り ま せ ん で
し た 。 ま た 、 避 難 訓 練 で は 、 放 送 で 避 難 場 所
を 言 わ れ る の で す が 、 そ の 放 送 が な り ま せ ん
で し た 。 そ の と き 先 生 が 、 み ん な を 廊 下 に 並
ば せ 、 私 た ち は 避 難 す る こ と が で き ま し た 。
階 段 の 壁 に 飾 ら れ た 絵 は 、 斜 め に な っ て い た
り 、 壁 が は が れ て い た り 、 ガ ラ ス が 割 れ て い
た り し て い ま し た 。 校 庭 に 避 難 し た 私 た ち は 、
思 い が け な い 光 景 を 目 に し ま し た 。 そ こ に 見
え た も の は 、 校 庭 の 地 面 が 数 十 メ ー ト ル 下 に
崩 れ て い て 、 下 の 様 子 は 見 る こ と が で き ま せ
ん で し た 。 そ の 後 、 そ の 学 校 は 取 り 壊 さ れ 、
今 は 新 し い 校 舎 を 作 っ て い ま す 。 そ の 間 私 た
ち は 今 通 っ て い る 中 学 校 や 、 隣 の 小 学 校 に お
世 話 に な り ま し た 。 そ の 後 、 す ぐ に 仮 設 校 舎
が で き 、 そ こ も 楽 し く 小 学 校 生 活 が 送 れ ま し
た 。 中 学 生 に な っ た 今 も 忘 れ ら れ ま せ ン 。

3	月	1	1	日	の	東	日	本	大	震	災	で	は	、	津	波	の	被
害	を	受	け	た	宮	城	県	だ	け	で	な	く	、	福	島	県	も	原
事	故	で	今	で	も	多	く	の	人	が	他	地	域	に	移	住	し	て
故	郷	に	帰	れ	ず	に	い	ま	す	。	し	か	し	、	私	は	津	波
原	発	の	恐	ろ	し	さ	、	ま	だ	苦	し	ん	で	い	る	人	が	大
い	る	こ	と	を	、	時	間	が	経	つ	に	つ	れ	て	段	々	忘	れ
自	分	と	関	係	の	な	い	も	の	と	思	う	よ	う	に	な	り	ま
た	。	そ	う	思	っ	た	こ	と	に	気	付	い	た	の	は	ニ	ュ	ー
番	組	で	津	波	に	娘	が	流	さ	れ	て	し	ま	っ	た	父	親	の
を	聞	い	た	と	き	で	す	。	父	親	は	「	娘	が	帰	っ	て	き
ら	な	あ	。」	と	ぼ	つ	り	と	つ	ぶ	や	い	て	泣	い	て	い	ま
た	。	私	と	お	な	じ	く	ら	い	の	歳	の	子	が	、	人	生	の
分	も	生	き	な	い	で	日	常	か	ら	突	然	消	え	て	し	ま	っ
と	思	う	と	、	学	校	に	行	き	た	く	な	い	な	と	思	う	自
が	嫌	な	奴	だ	と	感	じ	ま	し	た	。	だ	か	ら	、	震	災	の
め	に	亡	く	な	っ	た	人	や	、	今	必	死	に	行	き	よ	う	と
て	い	る	人	の	分	ま	で	今	の	生	活	に	感	謝	し	て	何	事
も	精	一	杯	取	り	組	み	ま	す	。	ま	た	、	震	災	の	怖	さ
甘	く	見	ず	に	災	害	に	備	え	る	の	を	大	人	に	な	っ	て
忘	れ	な	い	よ	う	に	し	た	い	で	す	。						

710

「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 中村 翔

2	0	1	1	年	の	東	日	本	大	震	災	と	原	発	事	故	に	よ	
り	、	学	校	の	授	業	や	休	み	時	間	で	の	校	庭	の	使	用	に
制	限	が	あ	っ	た	。	家	で	も	親	か	ら	「	マ	ス	ク	を	し	ろ
と	か	「	外	で	遊	ぶ	な	」	な	ど	と	言	わ	れ	た	。			
た	だ	、	当	時	は	小	学	校	4	年	生	だ	っ	た	た	め	、	福	
島	の	原	発	で	事	故	が	起	き	、	放	射	能	が	漏	れ	た	こ	と
は	分	か	っ	て	い	て	も	、	放	射	能	自	体	は	目	に	見	え	な
い	の	で	、	正	直	、	放	射	能	の	怖	さ	は	実	感	で	き	な	か
っ	た	。																	
震	災	か	ら	4	年	が	経	ち	、	水	道	や	電	気	な	ど	の	ラ	
イ	フ	ラ	イ	ン	が	復	旧	し	、	少	し	ず	つ	、	震	災	前	の	生
活	に	戻	っ	て	い	っ	た	。	放	射	線	量	が	高	か	っ	た	近	く
の	公	園	や	学	校	の	校	庭	も	除	染	で	線	量	が	下	が	っ	た
の	で	、	何	も	気	に	せ	ず	遊	べ	る	よ	う	に	な	っ	た	。	
僕	は	、	今	回	の	震	災	で	、	今	ま	で	「	当	た	り	前	」	
だ	と	思	っ	て	い	た	こ	と	が	「	当	た	り	前	」	で	は	な	い
と	い	う	こ	と	を	、	身	を	持	っ	て	体	験	し	た	。	こ	れ	か
ら	も	、	自	分	た	ち	の	住	ん	で	い	る	街	が	、	線	量	な	ど
何	も	気	に	す	る	こ	と	な	く	、	安	心	し	て	暮	ら	せ	る	環
境	で	あ	り	続	け	る	こ	と	を	願	っ	て	い	る	。				

(20文字 × 20行)

711

「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 中村 理紗

2	0	1	1	年	の	東	日	本	大	震	災	で	は	と	と	も	怖	い	
体	験	を	し	ま	し	た	が	、	原	子	力	発	電	所	の	事	故	の	怖
さ	は	、	正	直	言	っ	て	、	よ	く	分	か	り	ま	せ	ん	で	し	た
震	災	直	後	に	私	と	同	じ	大	森	小	学	校	に	入	学	し	た	
お	友	だ	ち	が	、	そ	の	後	す	ぐ	に	家	族	4	人	で	米	沢	へ
避	難	し	て	し	ま	い	ま	し	た	が	、	何	で	行	っ	ち	ゃ	う	ん
だ	ろ	う	と	思	う	程	度	で	し	た	。	ま	し	て	や	、	自	分	も
遠	く	へ	避	難	し	た	い	と	は	思	い	ま	せ	ん	で	し	た	。	
あ	れ	か	ら	4	年	が	経	ち	、	少	し	ず	つ	復	興	し	て	き	
て	い	る	こ	と	を	感	じ	て	い	ま	す	。	除	染	も	進	み	、	外
で	遊	べ	る	よ	う	に	な	り	ま	し	た	し	、	福	島	県	産	の	食
べ	物	も	ま	っ	た	く	気	に	な	ら	な	く	な	り	ま	し	た	。	
そ	し	て	、	米	沢	に	避	難	し	た	お	友	だ	ち	が	、	約	2	
年	前	の	3	年	生	進	級	時	か	ら	、	福	島	に	戻	っ	て	き	ま
し	た	。	私	は	う	れ	し	く	て	、	す	ぐ	に	み	ん	な	で	、	ド
ッ	シ	ポ	ー	ル	や	鬼	ご	っ	こ	を	し	て	い	っ	し	ょ	に	遊	び
ま	し	た	。																
家	族	が	い	て	、	友	だ	ち	が	い	て	、	み	ん	な	が	い	る	
福	島	が	、	そ	し	て	、	自	然	が	豊	か	で	食	べ	物	が	お	い
し	い	福	島	が	、	私	の	大	好	き	な	ふ	る	さ	と	で	す	。	

(20文字 × 20行)